

氏 名(国 籍)	林 ^{りん} 保 ^ほ 堯 ^{ぎょう} (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,094 号
学位授与年月日	平成 7 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	芸 術 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	法華造像の研究 —イザベラ・ステュワート・ガードナー博物館蔵東魏武定元年石造釈迦像考—
主 査	筑波大学教授 藝術学博士 真 保 亨
副 査	筑波大学教授 角 井 博
副 査	筑波大学教授 文学博士 相 馬 隆

論 文 の 要 旨

本論文は、米国ボストンのイザベラ・ステュワート・ガードナー博物館の所蔵になる東魏武定元年（五四三）銘の石造釈迦五尊立像を中心に中国南北朝時代における法華経信仰の造像を究明したものである。

内容は、第一篇造像刊飾（第一章から第四章まで）、第二篇造像画飾（第五章から第六章まで）、第三篇造像復原（第七章から第十章まで）の三部に構成し、全十章から成る。

第一篇は台座に刻された造像銘記の解明である。

第一章「問題の所在と研究方法」は、二節に分け、第一節でその伝来やシャヴァンヌ博士等先行研究の結果を述べ、いくたの問題点を拾い出し、第二節でそれに対する新しい解決法を考察している。

第二章「造像記文の用語及びその内容構成の分析と解釈」では、全体を七節に分け、第一節で造像記文の用語、第二節で造像年代、第三節で造像趣旨、第四節で造像像主、第五節で造像対象、第六節で造像誓願に細分して詳説する。第七節は結論であり、同時代の造像銘記を参考に、制作年代・目的・像主・対象・誓願等について分析し、その信仰思想を解明したことを述べている。

第三章「造像題名における像主尊像の構成と形式及びその図式の解釈と分析」は、全体を五節に分け、第一節で造像題名の構成、第二節で像主題名のある十六像、第三節で題名のない神王像、第四節で題名像の全体的構成と形式、と造像題名により分類して詳しく検討している。その結果として第五節の結論では、造像題名における像主尊像を考察して、これに係る造像団体を調べ、普通団員と布施団員の意義を明らかにする。次に尊像の全体を「釈迦五尊」・「左右二相」・「三世諸仏」・「二仏並坐」・「二観世音」・「二大金剛」・「十大神王」の類型に分けその構成様式を明らかにし、かつ

図式の系譜を見出だしたことを述べている。

第四章「造像題名の左右二相菩薩の構成と形式及びその図式の解釈と分析」では、四節に分けて、第一節で造像題名の左右二相、第二節で左右二相の題名の造像方位及びその構成、第三節で左右二相題名の構成形式及びその類型、と左右二相に注目し、その造像思想と発展を考察している。第四節の結論では、左右二相がインド伝来の新思想であり、北魏時代中国で取り入れ発展し後の造像表現に大きな影響を与えたことを述べている。

第二篇の第五・六章は造像画飾つまり本像の正面と背面における図像の論究である。

第五章「釈迦五尊と左右二相の図像構成及びその成立基礎」は、全体を八節に分け、第一節で正面及び左右二面の図像解説、第二節で正面及び左右二面の図像解釈、第三節で造像信仰における法華思想の表現、第四節で法華思想の造像構成の基礎、第五節で釈迦五尊に基づく左右二相菩薩の成立思想の考察、第六節で左右二相菩薩に基づく釈迦五尊の構成基礎の考察、第七節で左右二相菩薩の図像学的意義、と綿密に考証し、第八節に結論として、当時の信仰思想から考察を行った結果、『法華経』によって左右二相菩薩を二乗声聞身の立場で解明したことを述べている。

第六章「二仏並坐と二観世音の図像構成及びその成立基礎」は、五節に分けて、第一節で背面の図像解説、第二節で背面の図像解釈、第三節で背面全体の図像構成とその成立思想、第四節で破損した梵王尊像の復原、と作品背面における図像の詳しい分析をおこなっている。第八節で、結論としてこの図像のもとになった信仰を『法華経』によって解明したことを述べている。

第三篇は第七章から第十章までの造像復原に関する論述である。

第七章「破損した弥勒像の復原」は、七節に分け、第一節で弥勒像と釈迦像を一体とする造像構成、第二節で「釈迦弥勒」の造像信仰の表現、第三節で釈迦と弥勒の二像を一体とする銘記の構成類型、第四節で「釈迦弥勒」の図像構成の基礎、第五節で教理に基づく釈迦・弥勒二像一体構成の基礎理論、第六節で時代考察に基づく釈迦・弥勒二像一体構成の基礎理論、と総合的に釈迦・弥勒一体像を検討している。第七節で結論として、失われた弥勒像の位置を南北朝の諸例を参照して『法華経』の信仰に基づく「一乗真実」ないし『弥勒経』に説く「上下二生」の信仰をもからめ、その釈迦・弥勒一体造像の根拠を闡明している。

第八章「欠損した登王像の復原」は、四節に分け、第一節で登王像と釈迦像を一体とする図像構成、第二節で「釈迦定光」の造像信仰の表現、第三節で「釈迦定光」の図像構成の基礎、の順に論じ、第四節結論では、破損して不明であった登王像は定光像であり、釈迦像と一体であるその原初位置を明らかにしたこと、また先学による従来の燃燈仏の研究成果を引きながら、『法華経』の「一乗真実」及び結論にみられる「誓願受記」思想の具現に基づく釈迦・定光二仏造像の意味をも明らかにしている。

第九章「復原した尊像の全体構成」は、四節に分け、第一節で復原された尊像と、その「全体的」構成との関係、第二節で三世諸仏に基づく二仏並坐の思想成立の考察、第三節で二仏並坐に基づく三世諸仏の構成基礎の考察、第四節は結論として、上述の復原された弥勒・登王二像と釈迦像による三世仏、これに二仏並坐像の結合による五尊一体の造像表現を、『法華経』の「一乗真実」思想から流

れる三世諸仏の「理一同道」，ならびに同経『見宝塔品』にみる「滅後持経」・「久遠仏身」の思想が基礎となっていることを明らかにしている。

第十章「釈迦五尊と法華一乗における中国化された信仰表現」は、この論文の総論として書かれている。全体を三節に分け、第一節で尊像造型における構成の展開とその意義、第二節で「一体共構」による中国化された法華信仰の表現、第三節で釈迦五尊と法華一乗化の制作表現、と論を結ぶ。本章で、この作品の生れた時代における中国仏教の様相を詳細に検討し、その造像構成が法華信仰の中国化すると共に形成された独自の一体構成表現であり、中国における法華一乗化の信仰思想に基づいた「華は即ち仏であり、仏は即ち華である」といういわゆる曼陀羅様式へと華麗な展開を遂げたことを力説している。

巻末には、中国南北朝時代における造像諸例を文献と対比させて表記し、また菩薩・声聞衆の図像性格を『法華経』及びその論疏による表記、北涼石塔略表、参考文献、図版などを付している。

審 査 の 要 旨

イザベラ・ステュワート・ガードナー博物館の東魏武定元年（五四三）銘の石造釈迦五尊立像は、上部を欠失しているが、長方形の台座上に蓮華を置き、正面は中央に大きく釈迦如来立像、脇から伸長した蓮枝に小蓮華があって各二尊都合五尊像を刻出している。

背面は同様上部を欠失するが、浮彫で二仏並坐像を中心に両脇待等を廻らし、また両側面にも各一尊の立像を浮彫する。台座には正面に造像銘記、その左右端には金剛童子各一体、両側面に各三神像、背面に四神像都合十神の坐像を廻らす。制作優れかつ年代の明らかな中国美術史上の基準作として広く知られている。

従来、本作品については、シャパンヌ博士（発表1914年）・コーン氏（同1923年）・シレン博士（同1925年）等の研究があるが、いずれも当時流行の様式論に傾斜したもので表裏全体の図像解明には程遠い憾みがあった。著者はこの点に着目し、造像構成を全体の関連において捉え、この造像の典拠となった時代の仏教信仰を明らかにすることによってその解明を図ったのである。

著者は論文の組み立てに、きわめて意を用い、造像構成の解明に「造像刊飾」・「造像画飾」という中国南北朝時代の言葉をあてて、最も重要な二本の柱とし、銘記と像容を精査分析し、さらにこれをもとに銘記にあって画像にない登王像や弥勒像について「造像復原」を行い、演繹による論証という論理的ながらかつ困難な方法に取り組んでいる。そのための造像の背景をなす経典と教理の究明には全力を傾注している。その結果、左右二相菩薩・二仏並坐・二観世音・三世諸仏・十神王等本造像の構成諸尊の疑問点に対し、法華中国化による造像表現という考察によって本像の解明にはじめて成功している。

北魏時代に始まった中国化による造像表現は、とりもなおず時代の信仰思想を反映しその流れによって本像にみられる造像構成へと展開してきたことを縷々論述している。すなわち、法華一乗信仰による解釈によって、過去・現在・未来と連なる定光・釈迦・弥勒の三世一系の一体表現や、北魏時

代に誕生した菩薩・声聞一体化による左右二相菩薩を見事に解明し、また、古くから盛行した中国特有の十神王をも、法華一乗信仰に基づく大法護持・釈迦守護の立場で解決している。これら中国造像史上未解決であった図像解明を間然することなく図式化して証明したことは、前人未踏の分野を開鑿した学界の快挙として斯学に寄与すること大であり、きわめて高く評価される。

このことは、ひとり中国のみならず東亜の古典籍に精通した著者を以てして初めて可能ならしめたもので、造像構成における有機的連関を精緻にあますところなく考証し、造像の真正の姿を明確にした功績は甚だ貴重である。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。